

宮川庚子(みやかわ かのえこ)記念研究財団のロゴマークは「かたつむり」です。本財団のかつての機関紙「かたつむり」に「宮川庚子・生誕百年」とする記事が掲載されました。著者は同女史のご子息で本財団元理事の故宮川侑三先生です。同女史の「生い立ち」や「東京帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室、解剖学教室での研究」のことが詳しく書かれています。この記事の中に学位テーマ「邦人聴器ノ形態学的研究」に係る「蝸牛と三半器官の鑄型」の写真があります。蝸牛とは「かたつむり」のことで名前はその形態に由来します。財団ロゴマークの「かたつむり」は、故宮川侑三先生の奥様で本財団の宮川雅子理事がデザインされたものです。財団庭中央にある大きな「かたつむり」もお楽しみいただきたいと思います。「蝸牛と三半器官の鑄型」は東京大学耳鼻咽喉科教室で一昨年に永久保存が決まり、耳鼻咽喉科教室にご連絡いただければ、どなたでもご覧になれるはずです。



以下に「宮川庚子・生誕百年」記事を抜粋します。

平成12年(2000年)1月 財団旧機関紙「かたつむり」第33号より。

「宮川庚子・生誕百年」

宮川(旧姓西村)庚子は明治33年(1900年)1月19日に生まれた。2000年は庚辰にあたるので、10年毎に巡ってくる十干は1900年にも庚だったことになる。それにちなんで名前がつけられたと思われる(事務局注:1900年は「庚子」)。

庚子は大正10年(1921年)東京女子医科専門学校を卒業した。男尊女卑の風潮がのこる大正時代で、女性が医学へ進む道は限られていた。しかし、直ちに東京帝国大学耳鼻咽喉科学教室に入局した。増田教授はスイス留学から帰国したばかりで、欧米の医学に精通しておられた。頭蓋骨の底にある、骨の中に埋もれた複雑な内耳構造の鑄型を、あらかじめ中に溶かした金属を注入し、のちに骨の部分をアルカリで腐食して鑄造する方法を、留学先であったパーゼル大学のSiebenmann教授から伝授されていた。

そのテーマを庚子に与えたのだった。1925年からその目的で解剖学教室に出向する事になった。主任は井上道夫教授だった。午前中は耳鼻科教室で臨床業務を、昼から夜にかけては解剖学教室で内耳の鑄型を作る研究が6年間続き、その結果「邦人聴器ノ形態学的研究」を昭和5年(1930年)大日本耳鼻咽喉科会の会報に発表した。

昭和58年編纂の日本耳鼻咽喉科史に当時の写真と論文のフロント・ページが掲載されている。説明文に「本邦女医 医学博士は、西村(宮川)庚子をもって嚆矢とする。学位 医学博士、昭和6年1月8日論文提出により、東京帝国大学医学部教授会審査による。

文部省学位録順番 4455」とある。(蝸牛子)

